



症状がないことも

—慢性胃炎とは何か—

指導：東邦大学大橋病院消化器内科 教授 酒井 義浩

企画：
日本医師会

No. 158

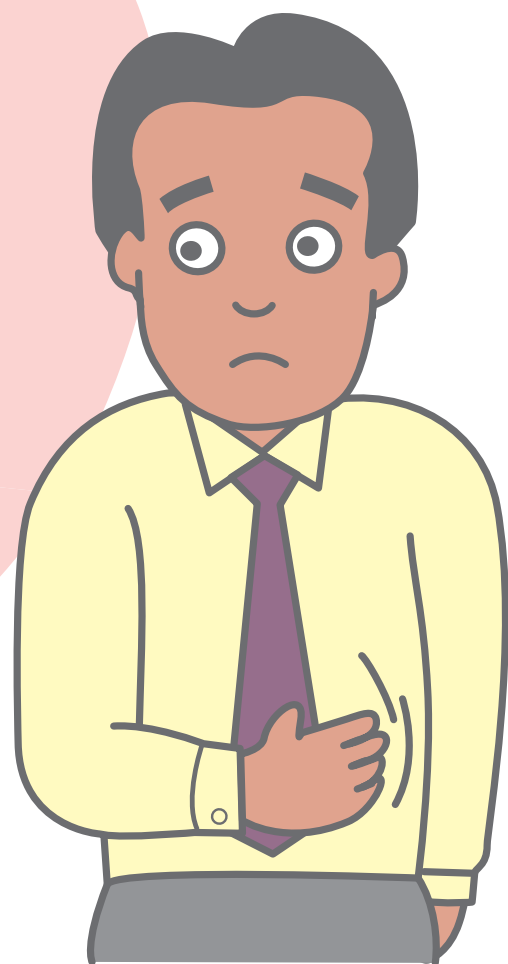
急性と慢性の違いは？

病名の前には“急性”や“慢性”がつくことがあります。急性とは日単位で病状が変化するものを意味することが多く、これに対して慢性は月単位、年単位での変化と考えることができます。かぜや食中毒の時に生じ、腹痛や胸焼け、嘔吐などを引き起こす胃炎は通常4、5日でよくなる急性胃炎です。一方、慢性胃炎では、胃の変化が1ヵ月以上続きます。



症状だけではわかりません

慢性胃炎は胃の粘膜に長びく異変が生じたものです。粘膜の状態はさまざま、実際にキズとして認識できるものから、色の変化だけのもの、萎縮が生じたものがあり、それらが混ざりあっているものもあります。胃の症状にも個人差があり、激しく痛みを感じる人もいれば、これといった症状のない人もいます。このため、慢性胃炎かどうかを知るには、内視鏡による診断が必要になります。



症状が
なくても

定期的に
検査を

胃がんとの関連も

内視鏡によって胃の粘膜の状態がわかれば、それに合わせた治療を行うことができます。最近では、老化現象と思われていた萎縮性の胃炎が、実はピロリ菌が原因ということもわかってきました。胃がんの発生と関連がないとはいええないだけに、症状がなくても定期的に内視鏡で検査をすれば安心です。一度、かかりつけ医にご相談ください。

◆待合室等に掲示し、患者さんにお見せください。